



卒意の俳句——角川源義の晩年

角川春樹

角川源義の晩年の句境という命題は、思っていた以上の難しさを伴い、おいそれとは、筆が運ばなかった。源義は私にとって父であり、俳句に於いては師である。最も身近であると同時に、没後の弟子であることから言えば、最も遠い存在でもある。私は源義の生前、一度として俳句について語り合ったことがない。源義の俳句を読んだこともない。没後、六年を経て、全句集が出版されて初めて、私は源義の俳句に触れることとなったのである。

しかしながら、角川源義という人物の、知られざる一面というエピソードなら、いくつもある。

かつて、角川書店から初の文芸総合誌を出そうという企画が立てられて、雑誌名を社内から募集することとなった。結果は、どれも似たりよったりのアイデアだったが、幾人かが「人間」というタイトルを推していた。かつて鎌倉文庫が「人間」という雑誌を出していたが、その後、廃刊となり、誌名に使うことも可能であると思われた。私は、社長である源義に、この「人間」というタイトルで雑誌を創刊したいと

述べたが、源義はがんとして受けつけない。理由を聞いて私はびっくりした。

「俺は人間の汗とか匂いとか、汚い部分が嫌いなんだ」

「しかし、人間が肉体を使つて戦っている時、その汗も、血も、セックスさえも、それは人間のいのちじゃないの。人間の生の姿の方が感動的だよ」

「それは、お前がまだ若いからだ。俺は、そんな人間の生しい姿は好かん」

結局、源義の人生観が「人間」というタイトルを拒否し、雑誌名は別のものとなった。私はこの時、角川源義という人物は、様式こそ美という意識で拘束されているという印象を受けた。しかし、この印象は、一面で正鵠を得、また一方では、すでに変化を見せ始めていたのだということを、源義の死後、間を置かないで識ることとなった。変化のきっかけは、末娘・真理の先立つ死であり、おのが肉体の極端な衰弱——父には病気が肝臓癌であることを知らせなかった——にあったと思われる。

昭和三十一年に出版された源義の処女句集『ロダンの首』には石田波郷の跋がある。

《今日の俳句は何よりも先づ作者の肉体的慾求があつて、その後に十七字があるとされてゐるが、著者は先づ俳句の形があると考へてゐると思ふ。俳句の形こそが何ものにも替へがたい魅力なのである。この形の中で自己表白をするといふ魅力は、他の如何なる文芸形式によつても果されない。それは陰微であつて陽映し、寡黙であつて無限に訴へる。》

波郷の慧眼は源義俳句の本質を見抜いていたばかりでなく、結果として、源義の人生観をさえ見通していたのである。源義にとって、俳句も人生もあるべき姿としての形があった。

しかし、五十八歳で急逝するという早過ぎる晩年の句に、次のような作品があつたことを葬儀の最中に姉の辺見じゅんから知らされた。

青すすき虹のごと崩えし朝の魔羅
月の人のひとりとならむ車椅子

昨年、富山市教育委員会の依頼で、辺見じゅんは「父・角川源義を語る」という題で講演し、その記録が市民大学叢書として出版された。その最後の章は「父の晩年」という便宜的なタイトルが附されている。前述の二句の背景が辺見じゅんの肉声で語られている。

《月の人のひとりとならむ車椅子

これは、父が亡くなる一か月ほど前でしたか、病院に入つております時、ちょうど九月の十五夜に、もう父は車椅子でしか病院の屋上に行くことができない。車椅子に乗って屋上で十五夜を見るわけです。「月の人のひとりとならむ車椅子」と詠んでいるのですね。

母に言わせますと煌々として、まるで父が月の中に吸い込まれてしまうような気がしたそうです。月の人のひとり自分分はなっている。これは父にとつて願ひだったのでしようか、それとも、そういう心持ちだったのでしようか。しかし五・七・五の最後の言葉は「車椅子」です。現実には、未だ父は車椅子に乗って生きている。つまり、父が自分が死んだ後のことを思ったのか、それとも死をひそかに予感していたのか……。父は自分が癌であるということを知りませんでした。(略)

青すすき虹のごと崩えし朝の魔羅

「魔羅」は、自らの男としての象徴です。自分のそういう男である象徴をも詠んでいるのです。つまりもう手業であるとか、巧く詠もうとかいう気持ちはない。正に父は最期の俳句に於いて、自らの生き方というか生きざまを示しているのです。この句は、父の絶唱です。男として、人間としての絶唱とも思えるのです。》

「月の人」と「青すすき」の背景と解説については、辺見じゅんの講演以上に述べる何物もない。俳句を形から入っていった源義は、死の直前に於いて、ただ絶唱しただけであ

る。人間の生な姿を好かんといった人物が、人間の平凡ないのちに直面して、あるがままに受け入れ、吐き出した言の葉が、俳句という器を瀟々として、読者に臨場感をもって伝わるのである。俳句が他の文芸と著しく異なるところは、実作者イコール読者であり、批評家でもある、という一点である。俳句の魅力は、実作者の感動が読者に伝わり、他の文芸に越境し、両者の間に感動の共振を起させることであろう。

「月の人」と「青すき」の二句を辺見じゅんから聞いた時、俳句には素人であった私に言い知れぬ感動を与えたのである。

角川源義の全句集を通読してみると、明らかに俳句に対する意識変革が行なわれている。それは、末娘・真理を自殺で失った慟哭の句集『冬の虹』であり、その後、三年を経て遺句集ともなった『西行の日』である。両句集にある「あとがき」が、作品とは別に、意識している世界について、言い方を変えれば、源義が目指すところの俳境について語りかけてくる。そういう意味では、角川源義という俳人は、常に語り部だった。

『神々の宴』につぐ第四家集である。悲劇は突然前触れもなくおとづれる。末子真理を亡くし、鎮魂の句業がいくばくか生じた。野辺送りをしていただいた方々に小冊子として頒ちたいと企てたこともあった。(略)

真理は遅れてこの世に生を得たので、大学を卒へ嫁ぐ日まで生きながらへねばならぬと、ひそかに人生の計を立ててゐる。

ふたなぬか過ぎ子雀の砂あそび
魂送る火をもて歩む西の方

源義がひそかに立てていた晩年の計が、一瞬にして潰えてしまった後、かえって晩年への思いをつのらせ、俳句への傾斜を深めていった。それが『冬の虹』という作品となり、その答えが「軽み」だった。しかし、「軽み」をもって、俳句の最高境地だと思ったわけではない。「軽み」もまた走り続ける人間にとって、プロセスなのである。そのことは態度のよい源義は予感していた。予感のまま、それを言葉にしている。芭蕉の先に別の何かがあると。再び、『冬の虹』の「あとがき」を引用する。

『私は芭蕉晩年の計が何であつたかと思へてならず、陰を陽に転ずる俳諧の企てをつづけてみたい。そのあとはどうなるのか、実は私にも判らない。軽みの句風で芭蕉は終焉を迎へている。』

源義の最後の句集となった『西行の日』は、五十八歳で急逝した時点での、俳句に対する答えである。語り部・源義にしては、「あとがき」の中でも直接触れていないが、芭蕉の先にある西行の存在を視点に捉えたのである。「軽み」俳句に拘泥すれば、それはもはや「軽み」ではない。

『去年の十一月、『日本近代文学大系』の打ち上げ式が四谷の福田家で行はれた。小林秀雄さんに久しぶりでお目にかかった。小林さんはいきなり「君、能谷守一」といふのはいい書だね」といふ。数年前京都の骨董屋へ入ると、能谷守一の

た。学問や句業や社業などの目的も、それに随伴して生じた。それまでには何とかなるだらうし、何とかせねばなるまいと思つた。しかし、真理の死によつて、私は終着駅を失ひ、乗換駅でまごまごし、別の目的地がしを始めてゐる。真理を野辺に送つた日から氣力を失ひ、何事にも手のつかぬ日々をすごした。年齢に似合はぬ晩年の意識が生じた。(略)

『神々の宴』に比して、この句集は明らかに変化してゐると思ふ。同時代の友人たちの作品を見ると、平明で軽みの句をつくるやうになつてゐる。私にもそれが云へるやうである。私はこれまで境涯俳句とよばれるやうな俳句を作らなかつたが、日々の生活を詠ふやうになつた。しかし、私は芭蕉晩年の計が何であつたかと思へてならず、陰を陽に転ずる俳諧の企てをつづけてみたい。そのあとはどうなるのか、実は私にも判らない。軽みの句風で芭蕉は終焉を迎へてゐる。俳人芭蕉にとつて、これは幸ひしてゐた。』

末娘・真理を失つたことが、源義の俳境を大きく変化させた。陰を陽に転ずる、平明な境涯俳句は、芭蕉の説く「軽み」の境地である。「あとがき」で源義が語るところの境地は、必ずしも作品として昇華されているわけではない。むしろ、あられもなく取り乱す作者の思いの丈が、直叙的に詠われ、その生の姿に、読者は感動し、作者と同じ悲しみを共有するのである。

たけくらぶ吾子はあらずよ今年竹
葬終へて庭広くなる蟻の塔

「福は内、鬼は外」の書が眼に入り、いくらだときくと、主人は売るわけには行かぬといふ。氣に入つたからほしいといひ出す小林さんの様子に、主人はあげませうと応へた。貰つたものだから売るわけには行かない。あげるのなら差支へないといふわけである。(略)

守一さんは野放途で明るい。巧いといふのではない。無慾な書であるのが感動させるのだらう。(略)

私は天下一下手な書だから、下手な書で生きることにした。問題は無慾な書である。これは生活が無慾でないと駄目だから、無慾な生活をしたと思つた。牧羊社が私の句集を出したいと申し出のあつたとき、守一の書を頂けたならと云つた。川島女史がさつそく守一さんの承諾を得、私の選んだ『西行の日』といふ句集名が見事な筆蹟でとどけられた。』

生き方の見事さという点で言えば、芭蕉は遂に西行を越えることができなかった。俳句は、残念ながら、概ね、論が作品に先行する。

『西行の日』に到つて、源義の俳句は「軽み」に達し、つぎなる徑を探り始めた。答えは「無慾」である。そして無慾の境地が作品に結実しかけたところで、早過ぎる終焉を迎えることとなった。源義は、西行について論ずることも、生活を無慾にすることもできぬうちに、その生涯を閉じてしまつた。しかし、その生涯を代表する謎のような一句を私たちに残して逝つた。

花あれば西行の日と思ふべし